

石川淳選集

第十七卷

石川淳選集 第17巻 (全17巻)

1981年3月6日 第1刷発行 ©

定価 1300 円

著 者 いし かわ じゆん
石 川 淳

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

西游日録	五
西遊五月の花	一三一
北京獨吟	一四九
附 元の佛畫のこと	一九〇
文林通言抄	一九五
附 録	三〇一
推薦文	三〇二
問と答	三二四
〔座談會〕石川淳論	三七

評論隨筆

七

西游日錄

の英雄の名を取つたものと聞く。

船がうごきはじめると、さつそくバーにはひつて乾杯はいふまでもない。酒はチナンドリ。このグルジャの白は地酒のおもむきがあつてかならずしもフランス産におとらない。晝の獻立は記すにおよばず。分量たつぷりである。五時半に茶。幸便にダゲスタンのコニヤツクをこころみる。ロシヤ人はこれをコンニャクと發音するやうにきこえる。海路平安。ことばはひとまかせにしても、せめてこんちはさよならといふロシヤ語の二つぐらゐはおぼえておく義理があつた。

世事すべてふたことで足る涼しさよ

一九六四年八月二十七日(木)。晴。午前十一時三十分、横濱よりオルジョニキーゼ號にて出發。安部公房、江川卓、木村浩、わたしとかぞへて同行四人。これはソヴィエト・ライターズ・ユニオンの招待を受けて立つた旅である。木村君と江川君とはロシヤ語に堪能のひとだから、道中ことばの苦勞はない。行程はまづロシヤで三週間、それから東獨とチェコとをめぐつて何日か、あとはパリに飛んでわたしひとりすくなくとも十月末まではかへらないつもりでゐた。十月末はすなはち東京オリンピックのをはつたのちである。オリンピックの東京といふ逆上ぶりを見ないですませるためには、ちようどわたり船であつた。この船の名のオルジョニキーゼは現在コーカサスの地名、もとむかし

晩めしは簡單。夜になつて、かさねてバーでシャンパンの乾杯。シャンパンといふ日本式發音はまたロシヤ式でもあつて、むかうでも同様にシャンパンといふ。御息災なはなしである。ただし、このシャンパン、フランスでいふ *vin mousseux* か。これはあとを引くほ

どのものではなかつた。ついでに記すと、出發前すでに狸穴のソ聯大使館の食卓にまねかれて實地にあぢはつたものだが、ロシヤはウオトカのほかにグルジャの葡萄酒とアルメニヤのコニャツクとをもつて誇ることが出来る。しかし、たばこのほうは天秤ががつたり落ちてどうもいけない。ただ船中ではさいはひに日本でもなじみの外國たばこの罐入をたくさん賣つてゐた。ここはまだ部分的に東京の延長のやうである。げんに日本の流行歌の女聲合唱がよつびてうるさくきこえた。おそろくなんとか黨のオバサンの講中だらう。女の花見のにぎやかさ。手がつけられない。

ところで、横濱の棧橋のことにして、船の出る時刻がのびのびになつて、せつかく見おくりに来てくれたみなさんにきのどくなおもひをしたが、それには仔細があつた。船のあがりくちに綱を張つて、ここが關所といふやうにちつぽけなテントまでかまへて、ひとを

ちかづけない。かういふことは異例ださうである。すると、大型バスが一臺おくれればせに乗りつけて、そこから吐き出された男女のむれがあたふた驅けて來た。なにものだらう。ロシヤ人とは見たものの、ジプシイがまじつてゐるやうでもあつたが、これがついさきごろ東京で一興行ぶつたかへりのボルシヨイ寄席藝人の一座とすぐ知れた。この一座の中の下まはり二名、赤坂のアメリカ大使館に驅けこんで、はやりの亡命としてやれてみせたことは新聞に出てゐた。そのとばつちりで、念を入れた關のかためとなつたにちがひない。しかるに、船内では、たしかに乗つたはずのその一座のめんめん、どこにひそんだのか、廊下にも甲板にも食堂にも、ひとりとしてそれらしき顔は見えない。きれいに影もかたちもない。どうしたのだらう。てつきりこらしめのために船底にでも押しこめをくつたのぢやないかと臆説がひろがつたほどの、みごとな消えつぷ

りであつた。

別にもう一つ。これも男女まぜて三十何人か、風體人相からいつて、どこかの避難民じみた外國人の一むれがゐた。ことばはフランス語。のべつにぺちやくちや。よく見ると、日光みやげの菅笠をぶらさげたのもゐる。なにが避難民なものか。シペリヤまはり共産圏をのぞく便宜もあるから、すなはちフランスの、それも田舎からの世界漫遊とお目につけたわけだらう。このほうはすがたを消すどころか、船内のどこにでもがやがやしてゐる。文句をつける筋はないが、いや、この一かたまりのさうざうしいこと。われわれはおとなしく酒をのむことにした。

秋めくやいそぐともなき船のゆれ

八月二十八日(金)。曇。午前中さしたることなし。

同船のウラジオストク某新聞の記者ロシヤ人なにが

しから申込があつたので、われわれ四人バーでこれと會談した。記者のいふことは尋常のインターヴィューではなくて、ともすれば論のはうにかたむく。論は政事に係りたがる。安部君がおもに應酬にあたつた。木村君と江川君とは通譯の勞をとるかたはら意見を述べなくてはならぬのだからいそがしい。わたしはなるべく口を出さないやうにして聞役にまはつた。はなしの内容は具體的にどうといふものではない。ただ奇妙なことに、「民族」とか「ナショナリズム」とかいふことばがそこに出ると、この記者はいやに緊張して来る。どうも氣にしすぎるやうに見える。それにはそれなりのかげの事情がおそらくあるのだらう。われわれ……いや、わたしの耳にはこの二つのことばはまづ概念としてきこえるが、ロシヤ人である記者の生理はただちにこれを事實として受けとるか勿ねかへすか、いはば對決をせまられてしまふやうである。民族といへば

んに生きてうごいてゐるとこかの人民のこと。ナショナリズムといへば今日の現實にあらはれてゐるなにかの状況のこと。さういふことが即座にぴんと来るにちがひない。主義とするところは相似であつても、國と國とのつながりにひびが入つては、理想上の世界といふ像が立ちゆくものかどうか。このときインターといふ組織はつぶれるものかどうか。またこのとき思想は國國に割れて野放しになるものかどうか。この思想はまんざらからつぽともいへまい。人民の血と生活とが賭けてある。當の人民にとつて氣にしすぎても無理でない。論にもなるだらう。しかし、わたしは論客ではない。さしあたつて船中の氣ままな時間を論に食はせるのはちと無理である。

午後二時半ごろ、船は津輕海峽にかかつてゐると知らされた。サロンで將棋なんぞさしゐるうちに、やがて日がくれる。食卓でチェリアーニをこころみる。こ

れはグルジャの赤。一番よいのはガムザといふさうである。またバーに河岸をかへて、モスクワ産のウォトカを酌む。びんづめの炭酸水あり。ナルザンといふ。安部君は手くびを痛めて早くベッドにはひつた。船はすでに津輕海峽から出てゐる。深夜の甲板に立つて空をあふぐと、雲間に半月の色がぼかし出された。時計の針を一時間すすめる。時差である。

八月二十九日(土)。曇のち晴。目がさめてから、夜中大雨のよしを聞く。海が荒れて、波のしぶきは甲板を打ち、船のゆれることはなはだしい。ただし、われわれは船酔らしきものはまったく感じなかつた。朝の食卓にキャビヤをたのんだが無いといふ。キャビヤは英語またはフランス語である。ロシヤ語では黒いイクラ。尋常のイクラのことは赤いイクラといふさうである。わたしは地元の飲みもの食ひものに文化のかけら

がひそむと見てゐるから、これをしつつこいまでに記した。

午後、波ややしづまる。甲板に出て本を讀んでゐると、かたはらにかのフランス觀光團の男女數名、高聲にしやべるアクセントが本のページにひびいて、フランス語の活字が飛びあがるやうであつた。船はそろそろナホトカに著く。旅行者チェックの中から五十ドルを替へて四十五ルーヴル。數字の上ではルーヴルはえらさうに見えるが、使用價值ではドルのほうが引きはなしてつよい。やがて、かなたに陸。山容暮色、日本のけしきとあまりかはらない。欄干に立てば、ナホトカの波止場は目の下にあつた。こどもがちよろちよろしてゐる。船ではみなおり支度の中に、ボルシヨイ一座はつひに消えつばなしのままであつた。

六時二十分下船。まだあかるい。バスにてただちに列車のまぢかに乗りつけて、あたへられた室に入る。

室は寢臺。行先はハバロフスク。發車までのあひだ、荷物を置いて、われわれは薄暮の巷をあるきに出た。

ポプラ並木のそよぐしづかな町である。町角にキオスク。これはロシヤ語でもおなじ。レーニン通にしてレストラン・ナホトカに小憩。ニシンが出た。なまのニシンを油と醋にさつとおよがせたもの。すこぶる賞すべし。メニューを見てなんとなくたのんだのだが、ここにかういふ伏兵が出ようとはおもはなかつた。目黒のサンマに非ず。

列車にもどる。夜九時發車。食堂に行つて四人ウオトカで乾杯。給仕の娘にニイナといふものあり。ぽつちやりして愛嬌がある。村醪の香また捨てがたきものか。

ニイナ略歴。六歳就學。學校は十年制。十七歳卒業。その後鐵道教習所一年終了。さらに實務一年。ことし十九歳。ハバロフスク現住。

右はわたしが問ひただしたのではない。同行某君の調査に依る。早いものである。

八月三十日(日)。曇。朝七時十五分ごろ、ルヂノ驛に停車二十分。ひとびとプラットフォームにおりる。さういつても、おりたところがつい道。そこには屋根もなく柵もない。ただ驛として小さい建物が見えるばかり。汽車の切符はあるが、改札もなく檢札もなく、下車のとき切符はそのまま持かへりのよし。切符なしで乗つたやつが見つかる、きびしく罰せられるといふ。ちなみに汽車はカマ焚きである。このあたりコスモス花咲いて、花は大。

食堂でニイナがわれわれに花の繪はがきをくれた。こちらからさきに日本の小さい品を贈つたので、その返しといふわけだらう。日ソ交歡。ただし、一般にソ聯の繪はがきは至つてオソマツである。つまらぬもの

に手間はかけない。結構。オソマツといったのは褒めたつもりではあるが、いくぶんはものたりないやうにおもつた。

われわれのあつまつた室に、ウラジオストックの通信社の記者なにがし、はひつて來ていろいろ問ひかける。なかなか退散してくれない。さきの船中の記者は論はぶつても氣のきいたところがあつたが、この車中の記者はどうも小うるさい。日本でも田舎に行くと、かういふのにぶつかることがある。

探訪記者はどこも似たもの秋暑し

さう、暑い。横濱を立つたとき夏服はあたりまへだが、その夏服の上著をぬいてもまだ蒸しあつい。窓の外はどこまでも平原がつづく。大平原ではあるもの、かなたの山にさへぎられて、けしきはさほどひらけない。山はみな小山。ただ日本の鐵道沿線とちがつて、うすぎたない廣告の立札なんぞが一つもないのはすが

すがしい。電信柱低く、秋天に雲うごかず、ときに雲の切れめから青空がのぞく。草の上に牛馬のすがたを見ることはまれである。たまたま水流を見る。農夫らしき男ふたり、平田舟に似たかたちのモーター船に乗つて行く。水はひややかなやうである。すべて青一色のけしきながら、ところどころに小さいモミヂの木があり、また向日葵はたけみじかく花をつけてゐる。この風景、尋常山野のおもむきを呈してはゐるが、これをよく見れば茫漠としてつかみがたく、おいそれと歌俳諧の手に乗るやうなものでない。やつぱり大をもつて稱すべきか。

やがて、ビヤーゼムスカヤにて停車十分。村驛である。このへんはシベリヤとはいつても、地圖にあたつて見ると、ほんの満洲の北のはづれ。シベリヤに来て候と、大きな口はきけない。寫眞をとることも禁止されてはゐなかつた。

午後三時すぎハバロフスク著。ここでもめごとが一つあつた。係のインツーリストの某女史、はなはだ親切ならず、われわれのもつてゐたモスクワからの招待状を取りあげたきりで返さうとしない。それがなくては、このさきの道中にさしつかへることがありうる。汽車係のインツーリストがモスクワまでいつしよについて来るわけではない。おそらく、このナターシャとかソオニヤとかいふもの、われわれの乗車について上司に報告するとき、しるしの招待状をふんだくつておいたはうが責任上好都合と手前勝手に考へたのだらう。日本の小役人の手口とそっくりではないか。客の迷惑をかへりみない仕打である。さいはひに、木村江川兩君、ロシヤ語の辯舌をもつてくだんの巻物を取りかへすことに成功した。さて、それからすぐモスクワに直行するか、ここに一泊するか。一泊としてホテルをどうするか。これまた連絡あやふや。八月中の、しかも

日曜日の午後とあつては、當地のユニオン支部にもひとがゐない。さうかうするうちに、ともかく當地泊としまつて、宿舎はアムールホテルといふところまで漕ぎつけた。ホテルの室は何階か、窓の外にバルコンが附いてゐる。そのバルコンに立つて見わたせば、廣い通に面してならんだ建物の屋根のかなたに、アムール河の片はしが光つた。

すでに夕方。食事は外に出ることにして、われわれがあれこれ相談してゐると、いきなりノックもなく扉があいて、半袖のシャツを著た若い男が一箇、のれんでもくぐるやうに氣輕にはひつて來た。その木の扉の内側にもう一重ガラスの扉が室を仕切つてゐる。若いやつはガラス越しの挨拶さへしないで、さつさと横にまがつた。横手は浴室である。その戸のがたんと鳴る音。つづいてシャワーの音。われわれはあつけにとられた。なんだらう、これ。他人の室に押しこんで來

て、だまつてシャワーといふ法があるだらうか。惡漢か。強盜か。強盜がひとつ風呂あびるのをかしい。どうもフランス人らしいとは見たが、それもたしかでない。ホテルのオバサンを呼んでも、すぐ驅けつけて來てくれるやうなそそつかしい仕掛にはなつてゐない。注にいふ。ロシヤのホテルではおほむね中年の女史が事務にあたつてゐる。ホテルは國營だから、オバサンは公務員。外來の旅行者がこれを疎略にあつかふことはできない。用はいひつけるのではなくて、先方の好意にうつたへてたのむものである。事もあらうに、強盜かも知れないやつをよろしくたのむとは、ウソにも婦人にむかつていへた筋合かどうか。好意にあまへすぎるな。變に應じて、われわれの手でカタをつけなくてはならぬ。そのとき、かの惡漢の武勇はどれほどか。こちらは四人とはいへ、わたしといふ大きい減點がある。他の三人の紳士にウルトラCを期待するほかない。

不安の二十分。やがて、シャワーの音がやむと、かの若いやつ、てらてらした顔を見せて、今度はガラス越しにこちらにちよつと手を振つて、つい扉の外に消えた。まぎれもなくフランス人。それもジャン・ギャバン主演のカットー写真の下つぱの役をつとめさうなくちであつた。のちに、はたせるかな、これはおなじ船に乗りあはせたフランス観光團の一員、事のここにおよんだのはなにかの手ちがへと知れた。その手ちがへの依つて来る所以はわざわざ記録するほどのことではない。このチンピラ、威厳あるオバサンにだいぶとつちめられたやうであつた。

われわれは夜の町に車をはしらせて、マルクス通のレストラン・ウスーリに行き、その特別室らしきところにおちついて、一日のごたごたのはて、やれやれ、乾杯。

八月三十一日a(月)。晴。午前中ライターズ・ユニオンのハバロフスク支部におもむく。この町の家は煉瓦造の舊形を保つたものが多く、古雅とまではいへなくとも、多少のふぜいがある。支部の建物もその一つ。役員と語る。當地は小説の新著おこなはれて、中には少数民族より出た作者もゐるといふ。これは日本では知られてゐないシベリヤ地方のある民族のことをいふか。ただ詩はかへつて古調をおもんじて、朗誦に適さない新形式をきらふ傾向のやうに見えた。

支部のひとの案内にて車で市中をめぐる。街路は幅ひろく、並木あり、花壇あり、廣場には鳩がむれてゐる。圖書館。ハバロフスク公園からアムール河畔を徒歩で行つて、その博物館を訪ふ。ざつと見たかぎりでは、博物館はおもにこの地方の動植物の歴史に關係してゐるやうだが、われわれはさきの旅路が長いので途中に足をとめるひまがなかつた。圖書館の建築は一